
ポケモン不思議のダンジョン～葉の救助隊～

猪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン〜葉の救助隊〜

【Nコード】

N8794Y

【作者名】

猪

【あらすじ】

突然人間からキモリになってしまった葉ヨウと、明るく心優しいが臆病なワニノコのベウ。ある時ふとしたことから出会ったこの2人は、救助隊を結成し、力を合わせてさまざまな困難に立ち向かっていく。

プロローグ（前書き）

はじめまして、作者の猪いのししです。このたびは、小説「ポケモン不思議のダンジョン〜葉の救助隊〜」を読んでくださりありがとうございます。少々長くなと思いますが、どうか最後までお付き合いください。

ブローグ

……ここは、どこだ……？

……そよ風が……気持ちいい……。

……どこかの草原に……寝そべってるようだ……。

……空気が……うまい……。

……なんてうまい空気なんだ……。

……それにしても気持ちいい……。

……このままずっと寝そべっていたい……。

「……え、ねえってば！」

……誰かが……呼びかけている……？

「ねえってば、起きてよ！ねえ！」

……うるさい。俺は寝ていたいのに……。

「ねえって！もしかして、死んでるの？」

……死んでたら返事もできないだろうが……。

……どうもこいつは……心配してるみたいだな……。

……そろそろ、起きるか……。

プロローグ（後書き）

今回のお話は、主人公である葉の視点でしたが、次回からは、第三者視点でお送りします。

キモリとワニノコ（前書き）

第2話です。今回は2人の出会いと自己紹介が主なので物語の進展はほとんどありません。

ベウ「こんなペースで本当に大丈夫なの？」

まあ、はっきり言ってやってみなきゃ分からんwあと、もうすぐ期末テストだから勉強で更新遅くなるかも。

ベウ「今日から連載始めたのに、早くもそんな宣言しちゃうの!？」

ヨウ「ってか、試験勉強しろよ。」

……2人して痛い所突かないで。

キモリとワニノコ

ここは、ポケモンの世界。この世界に人間はおらず、ポケモンのみが平和に暮らしている。そんな世界のとある場所に、ポケモン広場とよばれる所があった。広場といっても、そこには多くのポケモンが住み、小さな村のようになっていた所だった。

「はぁ……。」

ポケモン広場からそう遠くないところにある、名もなき小さな森のなかを、1人のポケモンがため息をつきながら歩いていた。

そのポケモンは、小さなからだの割に発達した大きなあご、短めで太い尻尾を持った、水色のポケモン、ワニノコである。

「どうしてオレは、こんなに臆病なんだろう…。」

そのワニノコが自分に愚痴った。

「結局今日も、ペリッパ―連絡所の前でためらって引き返しちゃったよ…。」

ワニノコは、歩きながらさらに愚痴り続ける。

やがて、目に涙をにじませながら言った。

「きっとオレなんか……この先ずっと臆病なまま……一生……。」

ついに泣き出そうとしたその時、ふと、倒れているポケモンがワニノコの目に止まった。

「あっ!!」

ワニノコは目ににじませていた涙を拭き、倒れているポケモンに駆け寄った。

「ねえ、キミ、大丈夫？」

そのポケモンから返事は返ってこない。

「ねえ、ねえってば！」

やはり返事はない。

「ねえってば、起きてよ！ねえ！」

ワニノコはしだいに焦る。

「ねえって！もしかして、死んでるの？」

“死んでいる”その言葉を自分で言っておき

ながら、ワニノコは震え出した。

（ま、まさか…本当に…）

ワニノコの恐怖がピークに達しようとし

た、その時だった。

「う…ん…」

そのポケモンが、小さくうめきながら立ち上がった。

「ああっ！良かったあゝゝ！！」

ワニノコが思わず安堵のため息をもらす。

「誰も死んじやいな……っ！？」

そのポケモンは、ワニノコと目が合った途端

に、あんどりと口を開け、ひどく驚いた表情

をした。

ワニノコはきょとんとしながら聞いた。

「どうしたの？そんなに驚いて」

ポケモンはさらに驚きながら言った。

「ワニノコが……しゃべった……！！？」

「え？」

ワニノコもさらにきょとんとした。

「オレがしゃべるのが……そんなに……変？」

その言葉を聞いて、ポケモンは考えこみだした。

ワニノコは今度は眉をひそめながら言った。

「キミ、ちょっと変わってるね。ポケモンの世界なんだから、オレがしゃべっててもおかしくないだろ？」

「変わってるのはお前の方じゃないのか？」

「え？」

ポケモンの発言に、ワニノコはまたきょとんとした。

ポケモンはさらに続けた。

「ここはポケモンの世界なんだろ？じゃあ何でお前は人間を前にして驚かねえんだ？」

「えっ！？人間！？」

その言葉を聞いた途端、ワニノコがすっとなきょうな声を上げた。

「人間　なんて、どこにいるの？」

「俺が見えねえのか？」

ワニノコの問いに、ポケモンが答える。

「何言ってるの？キミ、どう見てもキモリじゃん。」

「!？」

キモリと呼ばれたポケモンはこの上なく驚いた表情をしたあと、身体中を見渡した。

（黄緑色の身体に腹が赤い……！それにこの濃い緑色の尻尾……！！）

見渡ししながら身体の特徴を心の中で言うて、そして愕然とした。

「俺……キモリに……」

そう言いかけて口をつぐんだ。

（俺、何でキモリなんかに……あれ？）

キモリは必死に記憶をたどろうとするが、何も思い出せない。

（ど、どうゆうことだ！？もしかして、記憶喪失ってやつか！？な、何故！？）

考えれば考えるほど混乱していくキモリを見て、ワニノコはポカーンとしていた。

（本当に……変わっているのかも……。）
そう思いながらも、ワニノコはとりあえずと
いう感じで切り出した。

「そう言えばまだ名前を聞いてなかった

ね。オレはベウ。キミは？」

ベウと名乗ったワニノコは、険しい顔で考え続けるキモリに問いかけた。キモリはベウを少し見たあと、また考えだした。

（俺の……名前……）

少しの間、沈黙の時間が流れた。

「……もしかして、名前も思い出せない

の？」

ベウが恐る恐る訪ねた。キモリは答えない。

「ごめん、答えにくい質問して。なんだった

ら答えなくても……」

「ヨウ。」

突然キモリは答えた。しかしいきなりだった

ためか、ベウは「え？」と聞き返した。

キモリは繰り返した。

「ヨウ。木陰　　葉（コカゲ　　ヨウ）だ。」

ヨウと名乗ったキモリはまた考えだした。

そんなヨウにベウはそつと手を差し出した。

げげんな顔をしたヨウに、ベウは言った。

「よろしく、ヨウ。」

その言葉を聞いたヨウは、とりあえず普通の表情に戻し、ベウの手を握った。

キモリとワニノコ（後書き）

ベウ「名前もつたいぶりすぎだろ……」

それは多分今回の話の一番の反省点。自分でも書きながらまずいかもって思ってた。

ヨウ「まずいのは作者のテスト勉強じゃなくてか？（笑）」

……この場でテストの話禁止令……（泣）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8794y/>

ポケモン不思議のダンジョン～葉の救助隊～

2011年11月26日20時10分発行